

第5回ローカルサミットIN阿久根宣言

第5回ローカルサミットIN阿久根に集った志民は、最大級の台風の接近・通過という北薩摩の自然の厳しさと森里海の豊かさを全身で感じつつ、3日間の温かな交流と熱い議論を経て、ここに以下のことを宣言する。

我々は、基調講演で、「東日本大震災の復興を通じ、『漁師は海を恨まない』という言葉に象徴されるように、稲作漁撈文明である日本古来からの人と自然との優しくも厳しい信頼関係を取り戻し、森・里・海の連関に基づくいのちのやりとりを実感しながら、他者の幸せのために生きることで、日本再生を図り」、幾世代間に亘り嘗々と「いのちのバトンタッチ」が出来る暮らし方をローカルから再創造していかなくてはならないと確認した。

新しい暮らしは、何よりも、いのちの原点に立ち戻り、生きる意味を問い合わせると共に、生きる希望を子供たちと一緒に考え、世代を繋ぐ仕組みを、「ともに働き、ともに生きる」ローカルの小さな自立した循環の中から創り上げ、これまでの「成長、拡大」ではなく、「受け継がれる生き方への深化、豊かな関係の中での共棲」という新たな豊かさを追求する実践の中から育まれることを、7つの分科会の議論を通じて共有した。

そして、各分科会で確認された次のようなアクションプランは相互に連関し、志民各自がそれぞれの分野で一人ひとりが行動を変え、それを繋いでいくことで「原発に依存しない新たな持続可能な地域社会」が創られると確信した。

1. 被災地では、利他の心を發揮し、生きる意味を問う様々な行動を起こしながら、未来を担う子供たちと共に希望を見出していく。
2. 長期的視点での森・里・海の連環の取り組みを行いながら、小さくてもオシリーワンの仕事を重ねつつ、親の背中を見せていく。
3. エネルギーと食の自立から小さな循環を組み立て、多数の連携を図る。
4. 人類の存続に対する危機感を正確に持って、身の丈に応じた暮らしの中で、等身大の地産地消のエネルギーを実現し、次世代を育てていく。

5. アジアを知り、協業し、交流する、具体的アクションの一歩を踏み出す。

そのために、ローカルサミット IN アジアの開催を提唱する。

6. 首長、議会、行政、市民相互の信頼関係を築きながら、自らが参加する民主主義のプロセスの形成を図る。

7. 「華の 50 歳組」を繋ぐ「88 歳組」の伝承ミッションを導入し、広げる。

更に、こうしたローカルからの新たな暮らし方は、何よりも、志民と首長の共感・参加・協働による「新たなまつりごと」によって、不斷に革新しつつ、いのちの持続を確かなものにするように深化していくかなくてはならないと、首長サミットでも確認した。

我々はこうした自然・社会の各層での様々な新たな関係性と協業の仕組みを早急に構築しながら、いのちを営々と繋いでいくことに世界に先んじて価値軸を移行し、アジアとの具体的連携を深めていくことで、アジア諸国との共棲も図っていきたいと強く念じている。

平成 24 年 9 月 17 日
九州・阿久根にて